SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ミルの快楽説：
高級な快楽が低級な快楽より望ましいのはなぜか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米原, 優 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007850

ミルの快楽説

――高級な快楽が低級な快楽より望ましいのはなぜか――

Mill's Hedonism: Why Are Higher Pleasures More Valuable Than Lower Pleasures?

米　原　　優
Masaru YONEHARA

（平成25年10月3日受理）

Abstract

In *Utilitarianism*, John Stuart Mill asserts that higher pleasures, which only human beings can experience, are more valuable than lower pleasures, which animals can also feel. While some scholars claim that Mill thinks higher pleasures are more valuable because of their quality, others say that, in his view, their quantity makes them more valuable. In contrast to these interpretations, this paper asserts that the superiority of higher pleasures should be explained in terms of neither their quality nor quantity but in terms of a kind of pain that human beings can suffer in purchasing any lower pleasure. This pain derives from their recognition that they lead degenerate lives.

はじめに

ミルは『功利主義』第二章で、「人間特有の諸能力の行使により得られる快楽は、そういった諸能力を行使しなくても獲得可能な快楽より望ましい」と主張している。さらに、前者の快楽は後者の快楽よりも「質」という点で優れていると論じられ、「高級な（higher）快楽」と呼ばれる。それに対し、後者は「低級な（lower）快楽」と言われる（Mill 1861, 212/269頁）。この高級な快楽と低級な快楽という呼び名は一般的なものとなっており、それゆえ、ミルが同章で提示する主張は「高級な快楽は低級な快楽より望ましい」という主張として、広く知られている。また、ミルがどういった根拠で「高級な快楽の方が望ましい」と主張しているのかという問題についても、数多くの研究者による検討の対象となっている。そして、そうした研究者たちの解釈は、高級な快楽の「量」に着目する見方と、その「質」に注目する見方の二種に分類できる[(1)]。そのうちの第一の解釈の支持者によれば、ミルは「高級な快楽は低級な快楽より量が大きいから、より望ましい」と主張している[(2)]。一方、第一の解釈に反対する第二の解釈によれば、彼は「高級な快楽は低級な快楽よりも質という点で優れているから、それはより望ましいものであり、両者の量の差は望ましさの比較において全く問題にならない」と論

社会科教育講座

(1) こうした分類はミル研究のサーベイ論文を著した山本と川名のやり方に従ったものである（山本・川名 2006, 127-128頁）。

(2) そうした解釈を提示した著作として、Long 1992; Riley 1999を参照。

じている[3]。

以上二種の解釈からも見て取れるように、これまでの研究は、高級な快楽の望ましさを、その質や量によって説明しようとしてきた。しかし、そのような着眼で、ミルの真意を捉えるのは困難である。というのも、彼は快楽の質や量という観点から、「高級な快楽の方が望ましい」と言っているわけではなく、むしろ、低級な快楽を得ようとしたときに被る特定の苦痛の存在ゆえに、高級な快楽がより望ましいと考えているからである。そして、そう言える論拠を明らかにした上で、こうした解釈の意義を論じるのが本稿の目標である。構成は次の通りである。まず、第１節において、ミルが『功利主義』第二章で「人間特有の諸能力の行使により得られる快楽は、そういった諸能力を行使しなくても獲得可能な快楽より望ましい」ということの論証を行った目的を説明する。その後の第２節では、「ある快楽を別の快楽より望ましいものにする何か」として彼が措定する「（人々の）選好」に、第３節では、この論証で重要な役割を果たす「尊厳の感覚」に、それぞれ、特に注目しつつ、ミルの論証を分析する。最後に、結論で、本稿の解釈の意義を論じる。その意義を一言で言えば、そうした解釈を踏まえることで、ミルがこの論証において、快楽の「質」に言及した意図の把握が可能になるということである。

なお、本稿の重要概念の一つである快楽の「量」についてであるが、ミルの諸著作の中にそれへの明確な定義を見いだすのは困難である。これに関し、彼の快楽説を検討している多くの研究者たちによれば、ミルが言う快楽の量とは、その「強さ」と「持続性」のことであり、「ある快楽①は別の快楽②より量が大きい」は、「①は②より強い」または「①は②より長続きする」（あるいは、その両方）を意味する（Crisp 1997, 32; Donner 1991, 40; Scarre 1997, 351）。本稿もそうした解釈に従って議論を進める。

第１節　動物的快楽と人間特有の諸能力

『功利主義』第二章で、ミルは「快楽、および、苦痛からの自由が目的として望ましい唯一のものである」という「生の理論」を提示する（Mill 1861, 210/265頁）。このような理論は、現代において「快楽説」と呼ばれるものであり、「人間特有の諸能力の行使により得られる快楽は、そういった諸能力を行使しなくても獲得可能な快楽より望ましい」ということの論証は、それへの批判に対する応答の中で行われる。そこで、まず、こうした批判への言及を下で引用する。

> ところで、このような生の理論は多くの人々に、その中でも、感情や目的という点において最も賞賛すべき人々の心中に、根深い嫌悪を引き起こしている。そういった人々は、人生において快楽以上に高級な目的はない――つまり、より善く、より高貴な欲求・追求の対象はない――と考えることを（彼らはこの生の理論をそう表するのだが）、全くみすぼらしく卑しいこととみなし、こうした考え方を豚にのみふさわしい理論と呼ぶのである…。（ibid./265-266頁）

---

[3] このように解釈されたミルの主張が、彼の快楽説と両立するか否かは意見が分かれている。両立しないという見方に関しては、Scarre 1997を参照。一方、両立するという見方に関しては、Crisp 1997, ch. 2; Donner 1991, ch. 2を参照。

以上のように快楽説を低俗と考える人によれば、人間は「動物的欲求より高級な諸能力」を持つ存在者である（ibid./266頁）。こういった人間特有の能力は、「人にしかできない活動をする能力」とも表現できる。そして、そういう諸能力は、これを行使しなくても獲得可能な快楽より価値があるのにもかかわらず、快楽説において、このような価値の正当な評価は不可能であり、豚やその他の（人間ではない）動物でも感じることのできる快楽だけが望ましいものとみなされてしまうというのが、上の批判の要点である。

こういった批判に対し、ミルはまず、それが「人間は豚でも感受できるもの以外の快楽を感じることができない」という誤った想定に基づいていると指摘する（ibid.）。すなわち、人間が経験可能な快楽には、それ特有の諸能力を行使しなくても感じられる快楽だけでなく、そうすることで（つまり、人にしかできない活動により）得られる快楽も含まれるというわけである。なお、ミルは前者の快楽を「動物の快楽」や「単なる感官の快楽」と、後者の快楽を「精神的快楽」とも言うので（ibid., 210-211/266-267頁）、本稿では、以後「人間特有の諸能力を行使しなくても獲得可能な快楽」を「動物的快楽」、「人間特有の諸能力の行使により得られる快楽」を「精神的快楽」と呼ぶ。

そうした精神的快楽と動物的快楽に関し、ミルは「既知のエピクロス的な生の理論〔＝快楽説〕の中で、知性の快楽、感情と想像力の快楽、道徳感覚の快楽に、単なる感官の快楽よりも、快楽として、はるかに高い価値を認めていないものはない」と述べる（ibid., 211/266頁）。つまり、快楽説の支持者は「知性の快楽、感情と想像力の快楽、道徳感覚の快楽」といった精神的快楽を動物的快楽以上に望ましいものと考えており、この点で、批判者と同様、人間特有の能力や人にしかできない活動を（快楽の獲得手段としてではあるが）価値あるものと認めているというのが、ミルの主張である。

そして、彼による「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」ということの論証は、こうしたエピクロス的な生の理論の検討の上に企てられたものである。つまり、その論証をつうじて、精神的快楽やその源泉である人間特有の諸能力の価値を、快楽説の立場から示すことにより、批判者の論難からそれを擁護するのが、ここでのミルの企てである。以下、二つの節にわたって、そうした彼の論証の分析を行う。

第２節　快楽の評価と人々の選好

『功利主義』第二章で、「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」ということの論証を始めるに当たり、ミルはまず、「その他のあらゆる物事においては、量だけでなく質も考慮されるのに、快楽の評価は量だけに依存すると考えられるべきというのは、ばかげたことであろう」と述べる（ibid./267頁）。その後、快楽の「質」と「望ましさ」に関する疑問を二つ挙げ、それに答える中で、彼の論証における一つ目の主要な主張を提起する。そして、下で引用するのは、こうした疑問と回答に当たる部分である。なお、引用文中の「〈ａ〉」と「〈ｂ〉」は二つの疑問（文）の開始点を、「〈ａ’〉」と「〈ｂ’〉」はそれへの回答が提示される文の開始点を表す。また、この引用文は、本稿の今後の議論でもたびたび言及されるので、以降、それを〈快楽の評価に関するミルの発言〉と呼ぶ。

〈快楽の評価に関するミルの発言〉

〔〈ａ〉〕快楽における質の違い（difference of quality in pleasures）と言うことで私が何

を意味しているのか、あるいは、〔〈b〉〕量が大きいということ以外に、ある一つの快楽を、単に一つの快楽として見た場合に、別の快楽よりも、より望ましいものにするのは何かと問われるのならば、可能な答えは一つしかない。〔〈b'〉〕二つの快楽のうち、それらに精通した人が皆、あるいは、ほとんど全員が、それを選好しようという何らかの道徳的義務感とは無関係に、決定的な選好をそちらに与えるような快楽が存在すれば、それがより望ましい快楽である。〔〈a'〉〕二つの快楽の一つが、その両方を十分によく知る人たちによって、より高い地位に置かれ、たとえ、彼らは大量の不満足が伴うと知っていても、それを選好し、さらに、彼らの本性によって感受できる、もう一方の快楽の量がどれほどであったとしても、それを放棄しないほどであるなら、選好されたその享楽に、私たちが質における優越性を帰すことは正当化されるし、その優越性は量というものを凌駕し、比較の上で、それがほとんど問題とならなくなってしまうほどのものである。(ibid.)

〈a'〉の部分で、ミルの論証における一つ目の主要な主張が提示されているが、その内容をより正確に理解するため、まずは、冒頭の二つの疑問文〈a〉「快楽における質の違いと言うことで私が何を意味しているのか」と〈b〉「量が大きいということ以外に、ある一つの快楽を…より望ましいものにするのは何か」の分析を行う。最初に、〈a〉の「快楽における質の違い」であるが、ここでの「違い」とは「何かを別の何かから区別するしるし」と解される。つまり、快楽における質の違いとは「ある快楽を別の快楽から質という点で区別するしるし」であり、こうしたしるしは何かというのが、〈a〉で聞かれていることである。そして、「可能な答えは一つしかない」というミルの発言より、〈a〉と〈b〉の「何」は同じものということになるが、〈b〉の問いへの回答と考えられる〈b'〉の「決定的な選好をそちらに与えるような快楽が存在すれば、それがより望ましい快楽である」という箇所を見る限り、それは何らかの「選好」であろう。さらに、〈a〉への回答と解される〈a'〉の「もう一方の快楽の量がどれほどであったとしても」という部分を踏まえると、この場合の「何」とは「二つの快楽間での比較において、その両方をよく知る人全員、または、その大多数が、そのうちの量では絶対に劣ると知られている方に与える選好」と言うことができる。すなわち、こうした選好は「ある快楽を別の快楽から質という点で区別するしるし」となるので、その対象となる快楽に「質における優越性を帰すことは正当化される」し、そちらの快楽が「より望ましいもの」にもなるというのが、〈快楽の評価に関するミルの発言〉の主旨である。また、この場合の「質における優越性を帰すことが正当化される」とは、「ある快楽を「(別の快楽よりも)質という点で優れた快楽」と言うことが正当化される」を意味する表現であろう。

では、ある快楽をより望ましいものにする「選好」とは何か。この点に関し、『功利主義』第二章の中で参照すべきは、快楽の価値評価について論じられた次の一節である。

二つの快楽のうち、より享受する価値があるのはどちらか、または、二つの生き方のうち、その道徳的属性や帰結は別にして、〔我々の〕感情にとってより好ましいのはどちらかという問題に関しては、〔二つの快楽両方、または二つの生き方〕両方の知識によって、〔決定の〕資格を与えられた人々か、彼らの意見が相違する場合、その大多数の判断が最終的と認められねばならない。(ibid., 213/270頁)

引用文中の「より享受する価値がある」というのは「より望ましい」と同義であり、それゆえ、ここで最初に提起されるのは、「二つの快楽のどちらがより望ましいのか」という問題である。また、こうした問題に関しては、両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数の判断が最終的に決着をつけるとも論じられる。したがって、この発言は、快楽の価値評価に関し、次のような同値関係の存在を提示したものと解される。

〈価値の同値関係〉：ある快楽①は別の快楽②より望ましい＝①②両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数が「①は②より望ましい」と判断する

そして、ある快楽をより望ましいものにする選好とは、この〈価値の同値関係〉と関わる事柄であり、その実体は、二つの快楽をよく知る人たち全員（大多数）によって下される「ある快楽は別の快楽より望ましい」という判断であろう。また、〈快楽の評価に関するミルの発言〉の〈ｂ’〉「二つの快楽のうち、それらに精通した人が皆、あるいは、ほとんど全員が…決定的な選好をそちらに与えるような快楽が存在すれば、それがより望ましい快楽である」は〈価値の同値関係〉を別の仕方で言い表したものと解せる。

一方、その発言の〈ａ’〉では〈二つの快楽①②の両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数が、②の量がどれほど大きかったとしても、「①は②より望ましい」と判断するのならば、「①は②より質という点で優れている」と言うことは正当化される〉という主張が提示されていると言える。そして、この主張と〈価値の同値関係〉より、次の〈主張Ⅰ〉をミルの主張として導出できる。

〈主張Ⅰ〉：二つの快楽①②の両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数が、②の量がどれほど大きかったとしても、「①は②より望ましい」と判断するのならば、①は②より望ましく、かつ、「①は②より質という点で優れている」と言うことは正当化される

これが「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」ということの論証で提示される一つ目の主要な主張と言える。そして、ミルがこの論証を完遂するには、〈主張Ⅰ〉だけでなく、〈精神的快楽の一つ（Ａ）と動物的快楽の一つ（Ｂ）との間で、両方をよく知る人による比較が行われた場合、〈主張Ⅰ〉のようなかたちで、「ＡはＢより望ましい」という判断が下される〉ということも示さなければならない。つまり、彼は次の〈主張Ｐ〉も提示する必要がある（なお、「Ｐ」とはpleasureの頭文字である）。

〈主張Ｐ〉：精神的快楽の一つ（Ａ）と動物的快楽の一つ（Ｂ）の両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数は、Ｂの量がどれほど大きかったとしても、「ＡはＢより望ましい」と判断するので、ＡはＢより望ましく、かつ、「ＡはＢより質という点で優れている」と言うことは正当化される

さらに、〈主張Ｐ〉の導出には、〈主張Ⅰ〉と共に、次の〈主張Ⅱ〉も必要である。

〈主張Ⅱ〉：精神的快楽の一つ（Ａ）と動物的快楽の一つ（Ｂ）の両方をよく知る人全員、あ

るいは、その大多数は、Ｂの量がどれほど大きかったとしても、「ＡはＢより望ましい」と判断する

もっとも、この〈主張Ⅱ〉と全く同内容の叙述をミルの諸著作の中に見いだすのは困難である。しかし、次節で論じるように、〈快楽の評価に関するミルの発言〉の後で、彼が「尊厳の感覚」に言及する箇所を、そうした主張の提示として読むことはできる。さらに、ミルはこの尊厳の感覚という概念を使って、人々がＢの量がどれほど大きかったとしても、「ＡはＢより望ましい」と判断する理由の説明も試みていると解釈できる。そして、そうしたミルの試みは、彼が「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」という主張に与える根拠とも、強く関連する。なぜなら、「二つの快楽のうち、より享受する価値があるのはどちらか」という問題に関しては、「両方の知識によって、資格を与えられた人々か…その大多数の判断が最終的と認められねばならない」という発言（ibid.）を見る限り、ミルはＡとＢの両方をよく知る人たち全員（大多数）による「ＡはＢより望ましい」という判断の理由を、そのまま「ＡはＢより望ましい」ということの妥当な根拠とみなす可能性が高いと思われるからである。また、精神的快楽（全般）にはあり、動物的快楽（全般）にはない特徴の存在が理由となって、そういう判断が下されるのなら、彼は前者をより望ましいものにするのはこの特徴であると考えるだろう。ゆえに、次節では、尊厳の感覚の検討により、そうした判断の理由に関するミルの見方の解明を図る。

なお、本節で提示された〈主張Ｐ〉に関しては、〈ＡとＢの両方をよく知る人全員（大多数）が、Ｂの量がどれほど大きかったとしても、「ＡはＢより望ましい」と判断する場合に、「ＡはＢより質という点で優れている」と言うことが正当化されるのはなぜか〉という疑問が生じよう。そうした疑問への応答も、尊厳の感覚の実体を解明することで可能となるので、この疑問は次節の最後で改めて取り上げる。

第３節　尊厳の感覚

〈快楽の評価に関するミルの発言〉の後、彼は段落を変え、二つの生き方を話題にする。そして、その冒頭で次のように述べる。なお、下の引用文も本稿の後の議論でたびたび言及されるので、以降、〈生き方の評価に関するミルの発言〉と呼ぶ。

〈生き方の評価に関するミルの発言〉

ところで、両方を同等によく知り、同様に評価し、楽しめる人たちは、彼らのより高級な能力を使う生き方に、より顕著な選好を与えるということは疑えない事実である。動物の快楽を完全保証するという約束があっても、何らかの低級な動物に変えられることに同意する人はほとんどいないだろう。（ibid., 211/267-268頁）

尊厳の感覚に言及されるのは、この後であるが、ミルはこの発言で、それまでとは議論の方向を微妙に変化させていると考えることもできる。というのも、それまで問題となっていたのは、「二つの快楽のどちらがより望ましいのか」という問題であったが、ここでは「二つの生き方のどちらがより望ましいのか」という別の問題が提起されているとも解せるからである。そして、この二つの生き方の一つは、「（人間の）より高級な能力を使う生き方」であり、すなわち「人間特有の諸能力を使う生き方」である。一方、それと対比される「低級な動物」とは、「人間特有の諸能力を使わない生き方をする者」であろう。また、この引用文中の「より顕著な選

好を与える」は「より望ましいと判断する」と同義と言える。そうすると、〈生き方の評価に関するミルの発言〉の主旨は「人間特有の諸能力を使う生き方と、それを使わない生き方の両方をよく知る人は、前者は後者より望ましいと判断する」と表現できる。

しかし、二つの生き方に関する主張が提示される彼のこの発言も、「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」ということの論証の一部を構成していると解釈すべきである。というのも、人間特有の諸能力を使う生き方をより望ましいと考える人は、「精神的快楽（全般）は動物的快楽（全般）より望ましい」と判断する人とも言えるからである。そう言える理由は以下の通りである。まず、ミルによれば、精神的快楽とは人間特有の諸能力の行使により得られる快楽であるから、そういう諸能力を使う生き方をする人とは、「このような能力の行使により、精神的快楽を得ようとする人」でもある。ただし、「高級な快楽〔＝精神的快楽〕を感じられる多くの人が、時に、誘惑の影響で、低級な快楽〔＝動物的快楽〕のためにそれらを後回しにする」ということを彼は認めるので（ibid., 212/269頁）、そういう人をより正確に表現するのなら、「時に動物的快楽を得ようとすることはあっても、たいていは精神的快楽を得ようとする人」になるだろう。一方、人間特有の諸能力を使わない生き方をする人とは「それを行使しなくても獲得できる動物的快楽のみを得ようとする人」である。そうすると、「精神的快楽の追求」という活動の有無が、二つの生き方を区別する決定的な差異ということになるし、そうした差異が両方の望ましさに関する判断を左右しているとも言える。つまり、「人間特有の諸能力を使う生き方の方が望ましい」と考える人は、こうした差異を踏まえて、そう判断していると解せる。そして、そのような人たちに「精神的快楽（全般）と動物的快楽（全般）のどちらが望ましいのか」と聞けば、彼や彼女たちは「精神的快楽」と言うだろう。そうすると、〈生き方の評価に関するミルの発言〉の主旨を「人間特有の諸能力を使う生き方と、それを使わない生き方の両方をよく知る人は、前者は後者より望ましいと考え、また、精神的快楽は動物的快楽より望ましいとも判断する」と敷衍できる。

そして、ミルはこの発言の後で「尊厳の感覚」に言及する。その部分を下で引用するが、以後の議論では、次の引用文を〈尊厳の感覚に関するミルの発言〉と呼ぶ。

〈尊厳の感覚に関するミルの発言〉

より高級な能力を持つ存在者は、それより劣った存在者以上に、幸福になる上で、より多くのものを必要とするし、また、おそらく、より強い苦痛を被る可能性も高く、より多くの時点で、そうした苦痛を経験することは確かである。しかし、これらの障害があるにもかかわらず、彼が程度の劣る存在者と感じるものに堕落しようと意志することは、実際のところ、決してあり得ない。私たちはこのためらいを好きなように説明できる。我々はそれをプライドに帰してもよい…。また、我々はそれを自由や個人の独立への愛と呼んでもよい…。さらに、力への愛や高揚への愛と呼んでもよい…。しかし、それへの最も適切な名称は尊厳の感覚である。この感覚は、何らかのかたちで、そして、人間のより高級な能力と、完全にというわけではないが、ある程度比例したかたちで、人間誰もが持つものであり、それが強い人において、こうした感覚は幸福の本質的な構成物となっているので、これと対立するものは、一時的な場合を除いて、彼らの欲求の対象にならないほどである。（ibid./268-269頁）

引用文冒頭の「より高級な能力を持つ存在者」とは人間特有の諸能力を持つ存在者であり、つまり、すべての人間である。そして、ミルによれば、こうした人間はある種の「ためらい」を持っており、そういうためらいへの「最も適切な名称」が「尊厳の感覚」である。また、この場合の「ためらい」は「程度の劣る存在者と感じるものに堕落」することへのためらいと解せる。さらに、この「程度の劣る存在者と感じるもの」とは、〈生き方の評価に関するミルの発言〉で「低級な動物」と言われていたものであり、それに堕落するとは「人間特有の諸能力を使わない生き方をする」ということであろう。ゆえに、この「尊厳の感覚」とも呼ばれる「ためらい」は、「人間特有の諸能力を使わない生き方をすることへのためらい」と言える。それを踏まえると、〈尊厳の感覚に関するミルの発言〉の主旨は、「人間は皆、それ特有の諸能力を使わない生き方をすることへのためらいを持ち、そういうためらいは尊厳の感覚と呼ばれる」と表現できる。

さらに、尊厳の感覚は、「それが強い人において」、「幸福の本質的な構成物」になるとも言われている。とはいえ、こうしたミルの発言だけで尊厳の感覚の実体を把握することは困難である。また、これ以上に具体的なこの感覚への説明を、『功利主義』の中に見出すこともできない。しかし、『功利主義』の二十年以上前に書かれた「ベンサム」での叙述に着目すれば、こうした感覚が何かの解明は可能である。というのも、同著では「自尊や自分に対する尊厳の感覚」というものに言及されているからである（Mill 1838, 95-96/128頁）。若干の表現上の相違はあるが、『功利主義』における「尊厳の感覚」は、そうした感覚を意味すると解してよいだろう。そこで、以下、「ベンサム」において、この感覚にどのような説明が与えられているのかを確認する。

まず、ミルによれば、「自尊や自分に対する尊厳の感覚」とは「自分に対する高等感や堕落感であり、他の人々の意見とは独立に働いたり、それに逆らって働いたりすることさえある」（ibid.）。さらに、そのような感覚は人間の行為の動機の一つであるにもかかわらず、ベンサムの著作『行為の動機一覧』の中に含まれていないものであるとも言われる（ibid.）。そして、ベンサムの言うところだと、動機とは感じることが予想される快楽や苦痛であり、あらゆる行為はそうした快楽を感じ、苦痛を避けるために為されるが（Bentham 1789, 100/176頁）、この点に関しては、ミルもまた、尊厳の感覚を一種の快楽や苦痛と捉えているように思われる。そうしたことは、〈尊厳の感覚に関するミルの発言〉で、この感覚が、「それが強い人において」、「幸福の本質的な構成物」になると言われていることからも裏付けられる。というのも、ミルによれば、幸福とは「快楽」および「苦痛の不在」であり（Mill 1861, 210/265頁）、ゆえに、ここで言及される「それが強い人」とは、尊厳の感覚と呼ばれる快楽を感じ、苦痛を被らないことが、当人の経験する幸福の中で主要な位置を占める人を指していると考えられるからである。

では、この尊厳の感覚とは、どういう類いの快苦なのか。まず、「ベンサム」で、この感覚がある種の「高等感」や「堕落感」と言われていることから、それは「自分は高等な存在者である」と認識したときに得られる快楽や、「自分は堕落した存在者である」と認識したときに被る苦痛を指していると考えられる。また、〈尊厳の感覚に関するミルの発言〉によれば、尊厳の感覚とは「程度の劣る存在者と感じるものに堕落」することへの「ためらい」に与えられる「最も適切な名称」であるが、そうすると、「堕落感」の「堕落」とは「程度の劣る存在者と感じるものへの堕落」であり、さらに言い換えれば、「人間特有の諸能力を使わない生き方

をすること」であろう。つまり、「自分は堕落した存在者である」と認識するとは、「自分は人間特有の諸能力を使わない生き方をしている」と思うことである。だとすると、逆に「自分は高等な存在者である」と認識するとは、「自分は人間特有の諸能力を使う生き方をしている」と思うことであろう。

以上より、尊厳の感覚という快苦は、自分がどのような生き方をしているのか考えたときに生じる快苦と言うことができる。すなわち、自分の今の生き方について考えたときに、「人間特有の諸能力を使う生き方をしている」と思うと、「自分は高等な存在者である」という認識が生じて、快楽が発生するのに対し、「人間特有の諸能力を使わない生き方をしている」と思うと、「自分は堕落した存在者である」という認識が生じて、苦痛が発生する、こうした快苦がミルの言う尊厳の感覚の実体である。また、〈尊厳の感覚に関するミルの発言〉では、ある種の「ためらい」への「最も適切な名称」が尊厳の感覚であるとも言われていたが、この場合の「ためらい」とは後者の苦痛を感じることへのためらいであろう。以後、こうした「自分は堕落した存在者である」と認識したときに生じる苦痛を、〈堕落感による苦痛〉と呼ぶ。そうすると、〈尊厳の感覚に関するミルの発言〉の主旨を「人間は皆〈堕落感による苦痛〉を感じうる存在者であり、また、それを被ることへのためらいも持つ」と表現することもできる。

そして、こうした人間観に依拠すれば、ミルが〈主張Ⅱ〉の一部を主張することは可能である。そう言える理由を以下で説明する。まず、この〈堕落感による苦痛〉は、「自分は人間特有の諸能力を使わない生き方をしている」という認識が源となって生じる苦痛である。そして、人間がそういう苦痛を被ることへのためらいを持つのならば、それ特有の諸能力を使わない生き方ではなく、〈堕落感による苦痛〉を伴わない人間特有の諸能力を使う生き方をより望ましいと判断するはずである。また、〈生き方の評価に関するミルの発言〉の内容を敷衍して言えば、そのように「人間特有の諸能力を使う生き方の方が望ましい」と考える人たちは、「精神的快楽（全般）は動物的快楽（全般）より望ましい」と判断する人でもある。となると、ミルの人間観が正しければ、少なくとも大多数の人間はそう判断するということになる。そして、彼はそうした判断の理由も〈堕落感による苦痛〉を使って説明するであろう。というのも、この苦痛は動物的快楽（全般）を得ようとするときに被る苦痛とも言えるからである。すなわち、ある人が人間特有の諸能力を行使しなくても経験できる動物的快楽を得ようとするときに、自分の今の生き方について考えると、その人は「人間特有の諸能力を使わない生き方をしている」と思うし、その結果〈堕落感による苦痛〉を被る。そして、人間がそういう苦痛を被ることへのためらいを持つ存在者なのであれば、（大多数の）人は動物的快楽を得ようともしないだろう。

それに加えて、（大多数の）人が「精神的快楽（全般）は動物的快楽（全般）より望ましい」と考えているのなら、そういう人たちは、自分たちがよく知る精神的快楽の一つ（A）と動物的快楽の一つ（B）の比較においても、「AはBより望ましい」と判断するはずである。ゆえに（彼の人間観が正しいとすれば）、ミルが〈AとBの両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数は、「AはBより望ましい」と判断する〉と主張することはできる。とはいえ、これは〈主張Ⅱ〉の一部であり、それに含まれる「Bの量がどれほど大きかったとしても」の部分をどう説明するのか、この点は依然として不明である。

しかし、ミルはそれもBを得ようとするときに感じる〈堕落感による苦痛〉を使って説明するように思われる。そう言える理由を以下で論じる。まず、そうした〈堕落感による苦痛〉の存在を考慮に入れると、「AはBより望ましい」という判断は、（1）「〈堕落感による苦痛〉の

回避はＢの獲得より望ましい」という優劣評価を前提とした、（２）「（〈堕落感による苦痛〉を伴わない）ＡはＢより望ましい」という判断と考えられる。そして、事実、ミルは（１）のように「ある苦痛の回避」が「ある快楽の獲得」より望ましいと判断される可能性を認めており、また、この種の優劣評価を快楽の質や量の評価とは別種の評価と考えてもいる。それを示す彼の発言は、『功利主義』第二章において、前節で言及した〈価値の同値関係〉を提示した直後にある。そこでミルは次のように述べる。

> そして、量の問題に関してさえ、委ねられる裁決機関（tribunal）はその他にないのだから、快楽の質に関するこの〔裁決機関の〕判断を受け入れることへのためらいはより少ないはずである。二つの苦痛のどちらがより強いのか、あるいは、二つの快楽のどちらがより強いのかを決定する手段として、両方をよく知った人全員の表決以外に何があるのか。苦痛が皆同質というわけではないし、快楽もそうである、また、苦痛は常に快楽とは異質のものである。特定の苦痛という代償を払って、ある特定の快楽を追求する価値があるか否かを決定するものとして、経験ある人の感情や判断以外に何があるのか。それゆえ、こうした感情や判断が、より高級な能力に由来する快楽は、そうした能力とは無縁な動物本性でも感受可能な快楽よりも、強さの問題とは別に、質という点で勝っていると主張するのなら、それらはこの主題に関しても同じように〔決定の〕権限を与えられている。（ibid., 213/270-271頁）

ここで「二つの快楽のどちらの量が大きいのか」「二つの快楽のどちらが質という点で優れているのか」という二個の問題が提起されている。そして、そうした問題に関しては、両方をよく知る人たちの判断が最終的な決定権を持つと論じられる。つまり、「二つの快楽のどちらがより望ましいのか」という問題と同様、〈ある快楽①は別の快楽②より質という点で優れている（量が大きい）＝①②両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数が「①は②より質という点で優れている（量が大きい）」と判断する〉という同値関係がここで指摘されている。しかし、この箇所ではそういった二つの問題とは別に、「特定の苦痛という代償を払って、ある特定の快楽を追求する価値があるのか否か」という問題も提起されている。さらに、これは「ある快楽①の獲得には、ある苦痛②が伴う場合、①と獲得と②の回避のどちらが望ましいのか」という問題とも言える。また、この問題においても、〈①の獲得は②の回避より望ましい＝①②をよく知る人、あるいは、その大多数が「①の獲得は②の回避より望ましい」と判断する〉、および、〈②の回避は①の獲得より望ましい＝①②をよく知る人、あるいは、その大多数が「②の回避は①の獲得より望ましい」と判断する〉という同値関係が認められている。

「精神的快楽の一つ（Ａ）は動物的快楽の一つ（Ｂ）より望ましい」という判断の前提にあるのは、こういった快楽獲得と苦痛回避の間の優劣評価の一種である。また、それは快楽の質や量の評価とは別種の評価でもある。そして、ミルはこうした優劣評価が特異な性格を持つものであるがゆえに、〈Ｂの量がどれほど大きかったとしても、「ＡはＢより望ましい」という判断が下される〉という事態が発生すると考えているように思われる。彼はそれを別種の評価として扱う理由を明言していないが、おそらく、人々が「質や量という点で優れた快楽の獲得よりも、その獲得に伴う苦痛の回避の方が望ましい」と判断する可能性を認めているから、そうしているのであろう。確かに、質という点で優れた快楽の獲得よりも、その獲得に伴う苦痛を

回避する方が望ましいと考えられる場合はある。具体例を使えば、「金欠による飢えの苦しみ」という苦痛の回避と「哲学書を読むことの快楽」という高級な快楽の獲得のどちらを優先すべきかと聞かれれば、少なくとも大多数の人は「前者の苦痛の回避」と答えるだろう（つまり、「最低限の食料を買うための金を犠牲にしてでも、哲学書を買って読むのがよい」とは言わないだろう）。

また、とても量が大きい（大変強く、とても長続きする）快楽であっても、それを得る前に相当の苦痛を被るのであれば、そちらの苦痛を回避した方が望ましいと判断される可能性は十分にある。そして、「〈堕落感による苦痛〉の回避はBの獲得より望ましい」という判断は、この種の判断であろう。つまり、ミルはこうした優劣評価が「AはBより望ましい」という判断の前提にあると指摘することで、〈AとBの両方をよく知る人全員、あるいは、その大多数は、Bの量がどれほど大きかったとしても、「AはBより望ましい」と判断する〉という事態の説明を図ったものと思われる。そして、その説明のために導入されるのが、尊厳の感覚という快苦のうちの苦痛（〈堕落感による苦痛〉）であり、したがって、この苦痛の導入により、彼は事実上〈主張Ⅱ〉を提示したと言えるだろう。

さらに、ミルは「〈堕落感による苦痛〉の回避はBの獲得より望ましい」という優劣評価が下される理由を、快楽（苦痛）の量や質という観点から説明することは困難であり、それゆえに、この評価が「AはBより望ましい」という判断の最終的な（それ以上、説明不可能な）理由になると考えているようにも思われる。というのも、質や量という点で優れた快楽の獲得より、ある苦痛の回避の方が望ましいと判断される可能性を認めると、快楽獲得と苦痛回避の間で、一方が他方よりもよいと言える理由を、片方の快楽の量や質という点から説明するのは難しくなるからである。また、ある快楽の獲得に強い苦痛が伴うとしても、その快楽を獲得した方がよいと判断される可能性もあり得るので、そうすると、もう一方の苦痛の量や（それがあるとして）質という観点からの説明も困難である。だとすれば、「〈堕落感による苦痛〉の回避はBの獲得より望ましい」という優劣評価が、「AはBより望ましい」という判断の最終的な理由になる。そして、その最終的な理由を詳述すれば、「Bを得ようとすると〈堕落感による苦痛〉を被るが、Aを得ようとすれば、そうした苦痛を避けることができる。また、〈堕落感による苦痛〉の回避はBの獲得より望ましい」と表現できる。さらに、このような判断の理由は「AはBより望ましい」ということの妥当な根拠にもなろう。そして、その判断は「〈堕落感による苦痛〉の不在」という精神的快楽（全般）にあって、動物的快楽（全般）にはない特徴に基づいて下されている。ゆえに、これが精神的快楽をより望ましいものにする特徴と言える。そうすると、「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」ということの根拠は次のように表せる。

「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」ということの根拠：
動物的快楽を得ようとすると〈堕落感による苦痛〉を被るが、精神的快楽を得ようとすれば、そうした苦痛を避けることができる。また、〈堕落感による苦痛〉の回避は動物的快楽の獲得より望ましい

以上で行った尊厳の感覚という快苦の検討により、ミルの「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」という主張の根拠は解明されたと言える。ここで、そうした検討を踏まえ、前節の最

後で挙げた〈AとBの両方をよく知る人全員（大多数）が、Bの量がどれほど大きかったとしても、「AはBより望ましい」と判断する場合に、「AはBより質という点で優れている」と言うことが正当化されるのはなぜか〉という疑問に答える。まず、これまでの議論から明らかなように、ここでの「AはBより望ましい」と判断する人とは、尊厳の感覚という快苦を感じる人（ミルによれば、すべての人間）である。さらに、彼の考えに従うのなら、そうした人は「AはBより質という点で優れている」と判断するとも言える。そして、先の疑問との関連で重要となるのは、この点であるので、以下、そう判断すると言える理由を説明する。

まず、尊厳の感覚という快苦を感じる人は、人間特有の諸能力を使う生き方をする者が「高等な存在者」であり、逆に、それを使わない生き方をする者が「堕落した存在者」であると考えている。そして、これら二つの生き方の違いが「精神的快楽の追求」という活動の有無にある以上、人間特有の諸能力を使う生き方をする人を「高等な存在者」にするのもこうした活動である。ゆえに、こう考える人たちに、「精神的快楽（全般）と動物的快楽（全般）のどちらが質という点で優れているのか」と聞けば、少なくともその大多数からは「精神的快楽」という答えが返ってくるだろう。さらに、そういう人たちは、自分のよく知る精神的快楽の一つ（A）と動物的快楽の一つ（B）に関しても、「AはBより質という点で優れている」と判断するはずである。それに加えて、AとBの両方をよく知り、ゆえに、快楽の質に関する評価での決定権を持つ人々が、そう判断する以上、「AはBより質という点で優れている」と言うことも正当化される。

そして、ミルが〈AとBの両方をよく知る人全員（大多数）は、Bの量がどれほど大きかったとしても、「AはBより望ましい」と判断するので、「AはBより質という点で優れている」と言うことは正当化される〉と論じているのは、こうした事情によるものであろう。つまり、〈そのように「AはBより望ましい」と判断する人たちは、尊厳の感覚という快苦を感じる人であり、それゆえに「AはBより質という点で優れている」と判断する人とも言える〉というのが、彼のこの主張の要点である。ただし、注意すべきは、ミルの見方に従えば、こう判断する人たちは「AはBより質という点で優れている」という理由で、「AはBより望ましい」と考えているわけではないということである。すなわち、そういう人たちは、こうした快楽の質的評価に基づいて、「AはBよりも望ましい」と判断しているのではなく、あくまで、Bを得ようとするときに被る苦痛ゆえに、そちらを「より望ましくない」と評価し、そう判断しているというわけである。

結論

本稿で論じたように、ミルは「精神的快楽（高級な快楽）は質（あるいは量）という点で動物的快楽（低級な快楽）より優れているから、前者は後者より望ましい」と言っているわけではない。そうではなく、彼は「動物的快楽を得ようとするときに被る〈堕落感による苦痛〉の存在ゆえに、それを伴わない精神的快楽の方が望ましい」と主張しており、こうした苦痛の存在を見落としている点に、既存の解釈の不備はある。

さらに、そのような主張の前提にあるミルの人間観から、彼が「精神的快楽は動物的快楽より望ましい」ということの論証で、快楽の「質」に言及した意図の把握も可能になる。そして、本稿の成果の一つは、こうした人間観を解明したことにあるので、最後に彼の意図が何であったのかを論じて、その結びとする。ここで言うミルの人間観とは「すべての人は尊厳の感覚と

いう快苦を感じる」という見方である。もちろん、そういう見方に異議を唱えることはできる。しかし、おそらく、ミルは（当時の）人々の多くが「精神的快楽は動物的快楽より質という点で優れている」という認識を持っていると考え、さらに、こういった認識の根底には尊厳の感覚というものがあると想定したのであろう。そして、彼が件の論証の中で快楽の質というものを提示したのは、そうした質的評価を行う人々への一種のアピールだったのではないだろうか。すなわち、ミルはこのような人たちが「質という点で優れている」と考える精神的快楽や、その源泉である人間特有の諸能力の価値を、快楽説（彼の言い方では、エピクロス的な生の理論）が「目的として望ましい唯一のもの」と論じる「苦痛からの自由」という観点から説明することで、そうした人々の間にも快楽説への支持を広げようと意図したのであろう。そして、尊厳の感覚に着目する本稿の解釈の意義は、そういった彼の意図の見透しが可能になるという点にある。

文献表

Bentham, Jeremy. 1789. *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*. J. H. Burns and H. L. A. Hart, eds. Oxford: Clarendon Press, 1996.［ベンサム（山下重一訳）『道徳および立法の諸原理序説』『世界の名著49』中央公論新社、69-210頁、1979年。］

Crisp, Roger. 1997. *Mill on Utilitarianism*. London and New York: Routledge.

Donner, Wendy. 1991. *The Liberal Self: John Stuart Mill's Moral and Political Philosophy*. Ithaca and London: Cornell University Press.

Long, Roderick T. 1992. 'Mill's Higher Pleasures and the Choice of Character.' *Utilitas* 4: 279-297.

Mill, John Stuart. 1838. 'Bentham.' In J. M. Robson, ed., *The Collected Works of John Stuart Mill*, Toronto: University of Toronto Press, London: Routledge and Kegan Paul (abbr. CW), vol. 10, pp. 75-115, 1985.［Ｊ・Ｓ・ミル（川名雄一郎・山本圭一郎訳）「ベンサム」『功利主義論集』京都大学学術出版会、95-180頁、2010年。］

———. 1861. *Utilitarianism*. In *CW*, vol. 10, pp. 203-259.［『功利主義』『功利主義論集』、255-354頁。］

Riley, Jonathan. 1999. 'Is Qualitative Hedonism Incoherent?' *Utilitas* 11: 347-358.

Scarre, Geoffrey. 1997. 'Donner and Riley on Qualitative Hedonism.' *Utilitas* 9: 351-360

山本圭一郎・川名雄一郎　2006「ミル研究の現在」『イギリス哲学研究』第29号、126-134頁。